

当院の看護研究の紹介

脳神経センター阿賀野病院 看護部

○藤井 妃呂子, 落合 美恵子

私達は、平成 26 年度新潟県看護協会看護学会で「OH スケールによる褥瘡発生リスク評価に基づく体圧分散マットレスの使用状況の調査」と題して研究結果を報告しましたので、ご紹介いたします。

1. 研究の背景

当院には、進行期の神経変性疾患の患者さんが多数入院しております。同疾患の進行期は、運動機能や認知機能の低下のために、日常生活動作の多くに介助を要し、全身の様々な機能低下に付随する合併症は生命予後に大きな影響を与えます。その合併症の中で、褥瘡も合併しやすくかつ生命予後に関係する重要な疾患です。

褥瘡予防の方法の一つとして、患者の褥瘡発生リスクに適した高機能エアーマットレスを始めとする体圧分散マットレスの使用が非常に有効であり、本邦のガイドラインでも有用性が示されております。一方で、褥瘡予防に有効な高機能マットレスを有効に活用するためには、各病院や施設の実情に合わせた運用が必要であると考えます。

当院では、高機能マットレスの病院内での統一基準を用いた運用がされておりました。そのため統一基準の作成に先立って今回は全入院患者を対象として、褥瘡リスクを「OH スケール(全患者版)」を使用して患者を評価し、当院の実情の評価し、高機能マットレスの院内での統一基準の作成、および褥瘡の発症予防の指針作りを目指すこととしました。

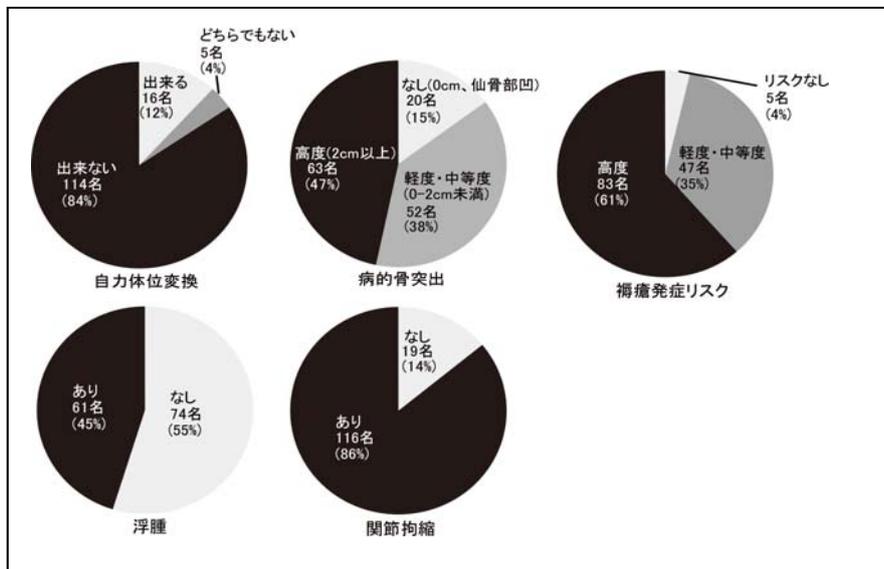
2. 研究方法

入院患者の褥瘡発生リスクの状況を OH スケールにより判定し、さらに各患者が実際に使用しているマットレスの状況、および褥瘡発生リスクの程度に適したマットレスに使用の有無、さらに平成 21 から 25 年の年間褥瘡発生率を調査しました。

3. 研究結果

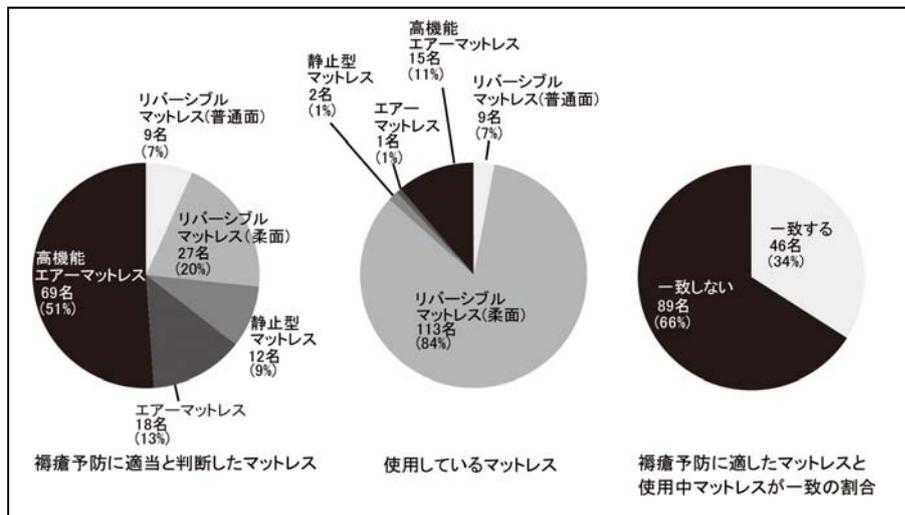
1) 対象者の褥瘡リスク評価

図の通り、当院では褥瘡発生リスクは、「高度」が 83 名 (61%) と最も多く、次いで「軽度・中等度」が 47 名 (35%) で、何らかの褥瘡発生リスクを有する患者が全対象者のうち 96% を占めておりました。



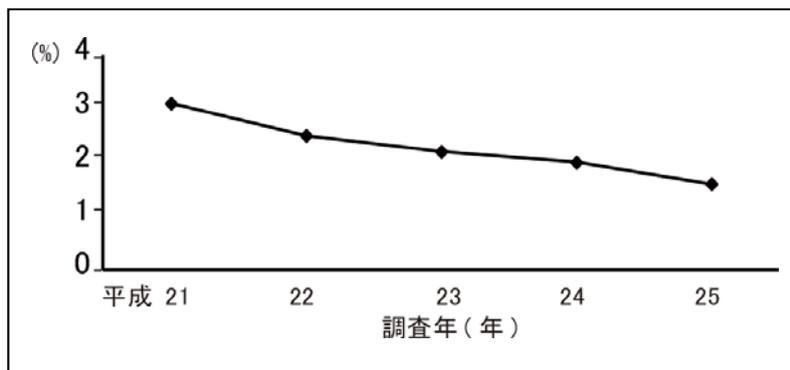
2) マットレス選択の状況

患者の褥瘡予防に適したマットレスの選択では、「高機能エアーマットレス」が必要な患者が 69 名 (51%) と最も多く、一方で現在使用中のマットレスは「リバーシブルマットレス(ソフト面)」が 113 名 (84%) と最も多く、褥瘡予防に適したマットレスと使用中のマットレスが一致しない割合が 89 名 (66%) でした。患者の褥瘡予防に適したマットレスが使用できない理由としては、マットレス不足が 69 件 (51%) と最も頻度が高い結果となりました。



3) 年間褥瘡発生率の推移

年間の褥瘡発生率は、平成 21 年からの調査では経時的に低下しており、平成 25 年は 1.6% でした。



4. 研究の考察

今回の看護研究で明らかになったことは、

- (1) 当院では、褥瘡発生リスクの高い患者が多い
- (2) 褥瘡発生リスクの高い患者数に対して、高機能マットレスの数は十分ではない
- (3) (1)や(2)にも関わらず、平成 21 年からの 5 年間は、褥瘡発生率が経時的に低下しているということです。

(1)については、当院が神経内科を専門とし、かつ進行期の神経変性疾患の患者さんが多数入院しているという病院の特色を強く反映しているものと考えます。また、超高齢化社会を迎えた日本では、多くの医療機関で高齢者への診療を余儀なくされます。そのため、褥瘡発生リスクが高い患者の占める割合が高いというのは、決して当院だけの特殊な状況ではなく、慢性期疾患や高齢者を対象した医療機関の多くに当てはまることだと思います。また、(2)の点についても当院に限った話ではなく、全身状態が悪化した高齢者を診療する医療機関の頭を悩ませる問題の一つであると思います。その状況において、褥瘡の年間発生率が経時的に低下しているということは、非常に興味深い結果であると考えております。

予想される要因としては、褥瘡の発生予防はマットレスの問題だけではなく、全身管理に関する問題であることがあげられます。たとえば栄養状態の悪化、肺炎などの感染症の合併なども褥瘡のリスクになります。他には、当院のスタッフの長年の経験も、褥瘡予防に大きく寄与しているのではないかと考えております。

今後は、前述の点を踏まえ、当院における年間褥瘡発生率の低下に寄与する因子を解明し、高機能マットレスの運用基準や褥瘡四号の指針を作成していきたいと考えております。

4. まとめ

超高齢化社会を迎えた本邦において、褥瘡四号は非常に重要なテーマであると考えております。今回の看護研究で新たな課題となった「年間褥瘡発生率の低下」に寄与する要因を、今後は明らかにしていきたいと考えております。